

本書で取り上げる摂津・河内・和泉は、現在の大阪府全域と兵庫県の神戸・阪神地域に該当する。戦国時代に「天下」とされた畿内のうち、首都京都と南都奈良の玄關口にあたり、淀川と大和川の下流に大阪平野が広がる。日本の中央部でありながらも、兵庫津と堺を擁し、倭寇の隆盛と大航海時代を迎えた東アジアと繋がる。

この地域には、足利将軍家を擁することなく京都を支配し、江戸時代初期には約二〇年にわたって「天下」を治めたと評された三好長慶や、武家で初めて関白となり、足利義昭を将軍から解任して、全国統一を果たした羽柴秀吉の本拠が置かれた。そのため、一つの地方でありながら、首都圏を構成する特殊な地域として位置づけられる。

摂河泉は室町幕府が所在する京都の防衛と吉野の南朝との戦いの最前線という二つの役割を担うことから、足利一族にして管領家の細川氏と畠山氏が配置された。しかし、畠山義就は嶽山城に籠り、足利義政に反旗を翻して、応仁・文明の乱の遠因を作り出した。そして、乱後も反幕府の旗を降ろさない。細川政元は正覚寺に在陣する足利義植を捕らえ、将軍の座から引きずり下ろし、明応の政変を断行する。堺公方と称された足利義維は、足利義晴を中心に幕府再建を夢見る細川高国を尼崎大物に滅ぼした。

そうした将軍家や管領家の分裂の中から台頭した三好長慶は、芥川城と飯盛城を本拠に近畿と四国を治める。大坂本願寺が三好一族と結び、織田信長と戦い続けたことで、信長の畿内支配はわずか二年に終わった。織田家の内紛を收拾した羽柴秀吉が、日本初の石垣造りの平城である大坂城を築き、全国統一を成し遂げる。

このように、室町幕府の衰退から統一政権の形成へと向かう原動力は、大阪平野にあった。「天下」の中心は、京都盆地から大阪平野に移りつつあったが、それは政治的な動きだけではない。戦国時代に人々の心をとらえた宗

教、すなわち、浄土真宗の本願寺は山科から大坂へ本山を移し、法華宗諸本山も比叡山延暦寺との対立の末に、京都から堺へ避難した。キリスト教も京都で迫害されると、飯盛城の三好長慶に庇護を求めた。本山と末寺を繋ぐ人や物の動きは、経済や流通にも密接に関わっていく。そして、多くの人々が大阪平野に集い、日本最大の寺内町じないまちである大坂、多くの豪商が集住する自治都市の堺や平野ひらの、複数の寺社がそれぞれ都市核となった尼崎をはじめ、多様な都市や村落、城郭を生み出した。

そこでの生活は、たびたび戦災や自然災害に脅かされたが、人々は祭りや騒ぎ、歌を詠み、新しい文化を生み出していく。